HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	満洲語三家子方言における母音調和の存在に関する考察
Author(s)	王, 海波
Citation	北方言語研究, 1, 79-99
Issue Date	2011-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45231
Type	bulletin (article)
File Information	nls-1-05.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 1: 79-99（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2011）

満洲語三家子方言における母音調和の存在に関する考察[1]

王　海 波
（東京大学大学院博士課程）

1. 満洲語の概況

1.1. 満洲語の使用概況

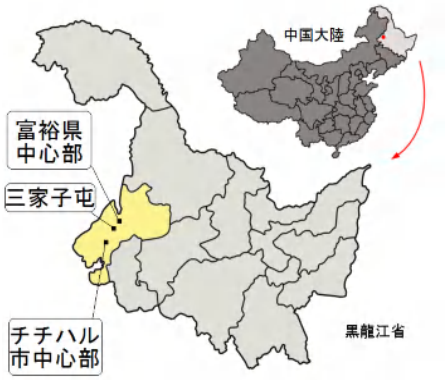

図1

満洲語は満洲ツングース語族満洲語派の言語であり、元々清国(1616-1912)を建てた満洲族の言語である。満洲語文語(以下「文語」)は 17 世紀から 18 世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。現在では、口語としての満洲語は、中国黒龍江省の数地点のごく少数の満洲族と、新疆ウイグル自治区のチャプチャル(察布査爾)シベ自治県の約 1 万 7 千人のシベ(錫伯)族によって話されているにすぎない(津曲 1992: 203)。黒龍江省の満洲語話者は黒河市の愛輝鎮、大五家子、藍旗村、卡倫山、孫呉県の四季屯、富裕県の三家子満族村(三家子屯)、泰来県の依布気満族村の 20 人位の古老のみである(赵阿平&朝克 2001: 2)。本稿で扱う満洲語三家子方言[2](以下「三家子」)は現在黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯(図 1[3])で話される満洲語の一方言である。三家子は文語より遅い時代の方言であるが、両者間における違いは全て文語から三家子への通時的変化によるものだとは言い切れない。逆に三家子には文語よりも古いと考えられる形の発音が残る例も見られる。例えば、文語の jiramin ‘厚い’と cira ‘強い’に対応する三家子の語はそれぞれ gilámə と kilá であり、j > g, c > k は相対的に起り難いと考えられる。そのため、本稿でいう通時的変化は文語の形式を根拠とするものではなく、三家子の内部再建を根拠とするものである。

1.2. 先行研究

本稿の目的は三家子の母音調和を考察することにある。先行研究には以下のものがある。

[1] 清格尓泰(1982=1998)は ɑ [ɑ], ɯ [ɯ], i [i], ɔ [ɔ], u [u], o [o, ʊ], æ [æ], e [e], y [y]という 9 つの母音音素を設定し、語における共起の可能性について記述した。

清格尓泰(1982=1998: 234, 269)には次のような記述がある。1 音節目以外の位置にある /ɑ/

---

[1] 本稿で扱う満洲語三家子方言のデータは筆者が 2008 年 8 月及び 2009 年 8 月に中国黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯で行った調査で得たものである。本稿を執筆するにあたり、東京大学大学院の林徹先生に貴重なアドバイスを頂いた。この場を借りてコンサルタントの方及び林徹先生にお礼を申し上げたい。

[2] 満洲語三家子方言は次の音素と単音を持つと考えられる。/a/ [ɑ~ɛ] /b/ [p~b] /c/ [ʧʰ] /c’/ [tɕʰ] /d/ [t~d] /e/ [e] /ə/ [ɤ~ə~ɯ] /f/ [ɸ~β] /g/ [k~g~q] /i/ [i] /j/ [ʧ~ʤ] /j’/ [tɕ~dʑ] /k/ [kʰ~qʰ] /l/ [l~ɾ~ɹ] /m/ [m] /n/ [n] /n’/ [ɲ] /ŋ/ [ŋ] /o/ [o~ɔ] /p/ [pʰ] /s/ [s~ɕ~tsʰ~ts~dz] /š/ [ʃ~ʒ] /t/ [tʰ] /u/ [u~ʊ] /ü/ [y] /w/ [w] /x/ [x~χ~ɣ~ʁ~ʔ] /y/ [j]。三家子の音韻的語には常にアクセントがつく。本稿では複数音節の語の場合、アクセントがつく音節の母音にアクセント記号をつけるが、単音節の語の場合、アクセント記号を省略する。

[3] 図 1 は http://en.wikipedia.org/wiki/Qiqihar にある地図を白地図に描いたものである。

は、[ɿ, ʅ, ʌ, ɤ]の変種があり、ɑ と ʌ で表記する(e.g. ɑŋŋʌ ‘口’)。ʌ ~ ɤ は ɯ となる場合がある。清格尔泰が ʌ ~ ɤ という表記を用いていることから、三家子における ʌ と ɤ が音素として区別する必要がない位に発音が近いということがわかる。一方、清格尔泰(1982=1998: 234)は /ɯ/ の変種について、「[ɤ]と[ɯ]の間の差異は顕著ではなく、表記を区別する必要がない」と述べている。即ち、[ɤ]はまた /ɯ/ の変種であるということになる(e.g. ɯmkɯ ‘1 つ’)。Lass (1984: 24)によれば、同じような環境では、異なる音素が同じ異音を持つことはできない (Biuniqueness)。そのため、同じような環境(例えば複数音節の語末)における[ɤ]~[ʌ]~[ɯ]は同時に /ɯ/ と /ɑ/ の変種とはならないはずである。しかし、清格尔泰(1982=1998: 234)の場合は、複数音節の語末にある[ɤ]~[ʌ]~[ɯ]に関して、/ɑ/ の変種としても捉え、 /ɯ/ の変種としても捉えている。更に、語根内の共起を記述するに当たって、清格尔泰(1982=1998: 269)は、[ʌ]~[ɤ]~[ɯ]と[ɑ]の共起は同じ音素の共起として扱っている。本稿では、Biuniqueness に従い、[ɤ]~[ɯ]を /ə/ の変種、[ɑ]を /ɑ/ の変種として扱い、異なる音素として認めることにする。

清格尔泰(1982=1998)の共起に関する記述には、語根内における共起以外に、語根と接辞の間における同化の例もある。例えば、tɑːᵠχɑ-b’u-ʁɔ ‘知り合う-Caus-Pfv’(グロスは筆者による)などが挙げられている。しかし、接辞の母音の交替に関する分析は行っていない。

[2] Nevins (2010: 87-99)は、Li (1996: 182)にある三家子の完了接辞に関する記述に基づき、完了接辞の交替の性質を分析している。また、完了接辞の形式に関する記述は Kim et al. (2008: 41-42)にも見られる。しかし、Kim et al. (2008)の記述と Li (1996)の記述は異なるところがある。Kim et al. (2008)は、完了接辞 -xV ~ -kV の母音 V は a と o という 2 つの母音の間で交替すると記述しているが、Li (1996)はそれは a, ɨ, ɔ, u という 4 つの母音の間で交替すると述べている。筆者の調査資料は Kim et al. (2008)のものと一致する。

1.3. 三家子満洲語の母音体系

三家子には以下の母音音素がある。

表 1　三家子の母音音素

	前舌円唇	前舌非円唇	後舌非円唇	後舌円唇
高	/ü/ [y]	/i/ [i]	/ə/ [ɤ~ə~ɯ]	/u/ [u~ʊ]
半高		/e/ [e]		/o/ [o~ɔ]
半低				
低		/a/ [ɑ~ɛ]		

1.4. 三家子満洲語の音節構造

1.4.1. 語根と接辞の音節構造

三家子満洲語の語の構造は普通「語幹-屈折接辞」という形式をとる。語幹は、(a)語根のみ、(b)語根と派生接辞、(c)複数の語根(すなわち複合語)、の 3 種に分けることができる。それぞれの場合の例として、budá ‘ご飯’、tándə-xə ‘殴る-Pfv’、təl-ə́m ‘その-1 つ’が挙げられる。

[1] 語根の音節構造

語根にある音節の種類を $(C_1(C_2))V((C_3)C_4)$ とまとめることができる。表 2 に語根の音節の可能な例を挙げる。語根は単数また複数の音節からなる。1 音節語根の例を表 2 に挙げる。2 音節語根と 3 音節語根の例をそれぞれ(2-1)と(2-2)に挙げる。4 音節以上の語根はない。

表 2　語根の音節の種類（注：1 列目は$(C_1(C_2))$であり、1 行目は$((C_3)C_4)$である）

	Ø	C_4	C_3C_4
Ø	V　例：**i** ‘彼；彼女’	VC_4　例：**ay** ‘何’	VC_3C_4　例：**abš** ‘どうやって’
C_1	C_1V　例：**ba** ‘場所’	C_1VC_4　例：**nun** ‘妹’	$C_1VC_3C_4$　例：**sayn** ‘よい’
C_1C_2	C_1C_2V　例：**bya** ‘月’	$C_1C_2VC_4$　例：**fyaw** ‘屁’	$C_1C_2VC_3C_4$　(例なし)

(2-1) 2 音節の語根の例

VV́	oű ‘上’	CCVCV́C	myac’án ‘銃’	CV́CCCV	fə́nckə ‘鉢’
VCV́	icí ‘新しい’	V́CCV	áŋŋə ‘口’	CVCCCV́	wiŋgyé ‘豚’
V́CV	újo ‘頭’	VCCV́	ulxá ‘家畜’	CVCCCV́C	xuntxán ‘杯’
VCV́C	ülúŋ ‘舌’	VCCV́C	əlgə́n ‘息’	CCV́CCV	xwáyte ‘縛る.Imp’
CVV́	goű ‘あまりに’	VCCCV́	aygmá ‘亀’	CCVCCV́	swandá ‘にんにく’
CV́CV	yásə ‘目’	CV́CCV	sə́mkə ‘あご’	CCVCCV́C	gwošxún ‘苦い’
CVCV́	mukú ‘水’	CVCCV́	yoŋŋá ‘砂’		
CVCV́C	yecín ‘黒い’	CVCCV́C	fulcín ‘頬骨’		

(2-2) 3 音節の語根の例

VCV́CV	owúlo ‘鼻’	CVCV́CV	fen’íxə ‘髪’	CCVCV́CV	kwadásə ‘袋’
V́CVCV	fáŋkələ ‘低い’	CVCV́CVC	bolóxon ‘全部’		
VCCV́CV	aŋŋə́lə ‘甕’	CVCCV́CV	suksáxə ‘大腿’		

[2] 接辞（屈折接辞及び派生接辞）の音節構造

接辞にある音節の種類は「$((C_1)V)(C_2)$」とまとめることができる。表 3 に各種の接辞の音節にある可能な例を挙げる。接辞は 1 つまたは 2 つの音節からなる。1 音節語根の例を表 3 に挙げる。2 音節語根の例を(2-3)に挙げる。

表 3　接辞の音節の種類（注：1 列目は$((C_1)V)$であり、1 行目は(C_2)である）

	Ø	C_2
Ø	Ø　例：**-Ø-** ‘名詞の動詞化接辞’ (axə́-**Ø**-m ‘雨が降る-Ipf (áxə ‘雨’ -Vr-Ipf)’)	
C_1	C_1　例：**-m** ‘動詞の未完了接辞’ (xa-**m** ‘防ぐ-Ipf’)	C_1C_2　(例なし)

V	V　例：**-i-** ‘形容詞の動詞化接辞’ (sayn’-**í**-m ‘治る-Ipf (sayn ‘よい’ -Vr-Ipf)’)[4]	VC_2　(例なし)
C_1V	C_1V　例：**-ko** ‘道具を表す接辞’ (ánt-**ko** ‘鍵 (anə- ‘押す’ -道具)’)[5]	C_1VC_2　**-kən ~ -kun** ‘指小接辞’ (bolgó-**kun** ‘清潔な-指小接辞’)

(2-3) 2 音節の接辞の例
VCVC　-axən ‘形容詞の拡大接辞’ (syaŋŋ-áxən ‘白い-拡大接辞’)
CVCV　-dale ‘毎’ (an’í-dale ‘年-毎’)

1.3.2. 語末の母音に関して

三家子には、音声的に語末が母音である複数音節の語がある。例えば、[wáxə] ‘殺す(完了形)’ などが挙げられる。[wáxə]には /wáxə/ と /wáxa/ と /wax/ などの音韻表記がありうる。その中で筆者は /wáxə/ を採用するが、その理由は次の 2 点である。

[1] 三家子には、他に /wax/ [wɑx] ‘殺す(完了相形動詞)’ がある。終止の場合に用いる完了形[wáxə]と、名詞などを修飾する場合に用いる完了相形動詞の形式の[wɑx]は、音声的にも形態論的にも異なる。したがって、語末の[ə]と ø を音韻的に区別する必要がある。

[2] /ə/ という音素は、アクセントがつく場合、[ɤ̞]となり、アクセントがつかない場合、[ə]となる(e.g. /ənckə́n/ [ənʧkʰɤ̞́n] ‘能力’)。前述したように、同じような環境では、異なる音素が同じ異音変種を持つことはできない(Biuniqueness)。三家子には /wə́xə/ [wɤ̞́xə] ‘融ける(完了形)’ がある。この語の語尾にある[ə]は /ə/ の変種である。そのため、[ə] は同じような環境では、他の音素の異音とはなれない。即ち、[wáxə]の語尾の[ə]は /a/ の異音とはなれない。したがって、[wáxə]の音韻表記は /wáxa/ ではない。

2. 母音調和の概念

[1] Anderson (1980: 6-13)は母音調和を定義する際、母音調和にしか見られない共通かつ不可欠な特徴を次のように提示した。(i)母音調和は母音の音声的動機による同化現象である。(ii)その同化は特定音節数(例えば隣の音節のみ)ではなく、ある形態的単位を範囲とする(unboundedness)。同化の範囲が隣の音節のみの場合は母音調和ではなく、metaphony である。

[2] Aoki (1968: 142-145)は類型論的視点から feature(性質), symmetry(対称性), alternation(交替)という母音調和の 3 つの分類基準を提案した。Feature の partial harmony には前舌対後舌、高対低、円唇対非円唇という 3 つの種類の母音調和が見られる。また、Anderson (1980: 32-41)、亀井等(1996: 1263)、Krämer (2003: 5)などによれば、舌の根の高さによる母音調和(即ち、ATR 対 RTR の母音調和)も見られる。

[4] sayn’-í-m では、sayn ‘よい’にある n は、-i- の同化により、n’ に交替する。
[5] 三家子では、3 音節の語は (2 音節目が不変接辞または 2 音節目に a がある場合を除き) 2 音節目にアクセントが来なければその音節の母音が脱落する(*ánə-ko > *án-ko)。また、nk は三家子に存在しない子音連続である。そのため、-t- が挿入される(*án-ko > án-t-ko)。

3. 共起と同化

3.1. 共起

3.1.1. 語根内の共起

［1］音素配列論的制限がない場合

表 4, 5, 6 は、前述(2.[2])した feature に基づく母音の共起の例である。

表 4　語根内における低い母音（a[ɑ]）とそれ以外の母音の共起

	i	ü	e	ə	u	o
a	ixán ‘牛’	(例なし)	án’e ‘年’	naxə́n ‘オンドル’	ulá ‘尻’	xodá ‘値段’

表 5　語根内における前舌の母音と後舌の母音の共起

	ə	o	u
i	c’íc’kə ‘鳥’	dolgí ‘中’	tulgí ‘外’
ü	dűygə ‘40’	oű ‘上’	(例なし)
e	fen’íxə ‘髪’	moxóle ‘帽子’	uj’én ‘重い’

表 6　語根内における円唇母音と非円唇母音の共起

	ə	e	i	a
u	úsə ‘種’	uj’én ‘重い’	tulgí ‘外’	ulá ‘尻’
o	(1 例のみ[6]) kəlmúko[7] ‘影’	xónj’ke ‘親戚’	sísko ‘敷布団’	xodá ‘値段’
ü	dűygə ‘40’	c’űc’e ‘出る.Imp’	düylín ‘真中’	(例なし)

Krämer (2003: 11)によれば、音韻的なレベルで ATR と RTR を区別しない母音体系には、ATR と RTR による母音調和がありえない。三家子の場合、/u/ には[u]と[ʊ]という異音、/o/ には[o]と[ɔ]という異音、/ə/ には[ɤ]と[ɯ]と[ə]という異音がある。したがって、[u]と[ʊ]、[o]と[ɔ]、[ɤ, ɯ]と[ə]が示す ATR と RTR の区別は音声的なレベルにあり、音韻的なレベルにはないと言える。一方、音韻的なレベルでは、/a/ と /i, e/、/o/ と /u, ü/、/e/ と /i, ü/ などはそれぞれ RTR と ATR の対立を示す可能性がある。しかし、表 7 から、上記の舌の根の高さが異なる音素は同じ語根での共起が可能であることがわかる。

表 7　語根内における ATR と RTR と考えられる母音の共起

	a		o		e
i	ixán ‘牛’	u	súlo ‘賢い’	i	wiŋgyé ‘豚’
e	án’e ‘年’	ü	oű ‘上’	ü	c’űc’e ‘出る.Imp’

[6] o と ə が語根において共存する例には kəlmúko 以外に、doxšə́-m ‘震える-Ipf’ も存在する。本節で挙げた例は全て接辞のつかない語根の例である。しかし、doxšə́-m には未完了接辞がついている。三家子では動詞の接辞がつかない形式は命令形のみであるが、動詞の命令形と、未完了接辞の前の形式は必ずしも同音とは限らない((3-1)及び表 15 を参照されたい)。doxšə́-m の命令形は、現在までの調査では見つかっていない。

[7] kəlmúko に対応する文語の語は helmen であるため、kəlmúko の ko は接辞である可能性がある。しかし、ここの ko が接辞であるか否か、接辞である場合、何の役割をするのかに関しては筆者には不明である。

［2］音素配列論的制限がある場合

a, u, i, ü はアクセントを持たない場合、少数の例外を除いて語末に現れない。一方、ə, o, e はアクセントを持たない場合でも、語末に現れる例が多い。例えば、動詞の未完了形から命令形になる場合、(3-1)のような交替がある[8]。

(3-1a) a > o / _ #, without accent　例：fyawt***á***-m ‘屁をする-Ipf’ > fyáwt***o*** ‘屁をする.Imp’
(3-1b) u > o / _ #, without accent　例：cuk***ú***-m ‘突く-Ipf’ > cúk***o*** ‘突く.Imp’
(3-1c) i > e / _ #, without accent　例：il***í***-m ‘立つ-Ipf’ > íl***e*** ‘立て.Imp’
(3-1d) ü > e / _ #, without accent　例：c’üc’***ű***-m ‘出る-Ipf’ > c’űc’***e*** ‘出る.Imp’

三家子では、2 音節の語が他の音節数の語より多い。2 音節の語の中では、$(C_1)\acute{V}_1C_2V_2$ という音素配列をとる語が他の音素配列をとる語より多い。次の表 8 は、この音素配列における各母音の例である。$(C_1)\acute{a}C_2o$ の場合、例は áxo のみである。また、アクセントを持たない a, u, i, ü は語末にほとんど来ないため(3-1)、表 8 では省略する。

表 8　$(C_1)\acute{V}_1C_2V_2$ の例（注：1 列目は $\acute{V}_1$ であり、1 行目は V_2 である）

	ə	o	e
a	áxə ‘雨’	áxo ‘ない’	án’e ‘年’
i	síkə ‘小便’	íno ‘はい’	íj’e ‘染める.Imp’
ə	bələ ‘米’	(例なし)	(例なし)
e	n’éxə ‘鴨’	(例なし)	béle ‘弓’
o	(例なし)	sólo ‘ひげ’	ój’e ‘キスする.Imp’
u	úsə ‘種’	núlo ‘酒’	(例なし)
ü	(例なし)	(例なし)	c’űc’e ‘出る.Imp’

3.1.2. 不変接辞内の共起

三家子には、形態音韻論的条件により母音が交替する異形態を持たない接辞がある。例えば、-axən ‘拡大’、-bə ‘対格’、-bu- ‘使役、受身’、-dale ‘～毎’、-də ‘与格’、-dele ‘奪格’、-nji- ‘移動’、-l ‘未完了相形動詞’、-m(ə) ‘副動詞’、-na- ‘移動、共同’、-sək~-səl ‘～のような’、-x ‘完了相形動詞’がそれに当たる。これらの接辞の一部(-bə, -də, -dele)は接語の性質を示す場合もある。この種の接辞で 2 音節以上の例は -dale、-dele、-axən しか見つかっていない。そのうち -dale においては、a は前舌の[ɛ]として現れるため、e [e]との共存は前舌と後舌の共起を示さない。一方、-axən は低い母音(a)と低くない母音(ə)の共起の例である。

3.1.3. 考察

3.1.1.[1]によれば、ü と a, u は共起しない。ə と o の共起は一例のみである。3.1.1.[2]によ

[8] (3-1)の u と o、i, ü と e の交替は、ATR と RTR の交替のようである。しかし、(3-1)では、語根の他の音節の母音は交替しない。母音調和は音韻的な語を範囲とするため、(3-1)は母音調和の性質を示さない。

れば、$(C_1)\acute{V}_1C_2V_2$ の音素配列をとる語では、ə と o の共起が存在しない他に、(C_1)əC$_2$e, (C_1)úC$_2$e, (C_1)éC$_2$o, (C_1)ǘC$_2$ə, (C_1)ǘC$_2$o も存在しない。なお、(C_1)áC$_2$o は一例のみである。

表 9 は基礎語彙集(王海波 2009: 173-228)に基き、各母音の出現頻度を統計したものである。表 9 から、ü と e の頻度が非常に低いことが分かる。そのため、ü と a, u が共起しないこと及び(C_1)əC$_2$e、(C_1)úC$_2$e、(C_1)éC$_2$o、(C_1)ǘC$_2$ə、(C_1)ǘC$_2$o が存在しないことは、ü と e の低い出現頻度による現象であるという可能性がある。しかし、a, ə, o はどれでも頻度が低くないにもかかわらず、ə と o の共起の例及び(C_1)áC$_2$o の例はそれぞれ 1 例のみである。

表 9　各母音の出現頻度

	a	ə	u	i	o	e	ü
出現頻度	28%	23%	16%	15%	12%	5%	1%

上記の現象から、高母音と低母音、前舌母音と後舌母音、円唇母音と非円唇母音、ATR の母音と RTR の母音という 4 つのパターンの母音の共起がほぼ全て可能であることがわかる。これにより、三家子の母音をグルーピングする必要性は見出せない。三家子における母音調和の有無を探るため、次に同化の現象を考察する。

3.2. 同化

語根に接辞が後続することにより、語根が接辞の母音に影響を与える例と、接辞が語幹の母音に影響を与える例のどちらも存在する。

3.2.1. 語根の母音が接辞の母音に与える同化

3.2.1.1. 屈折接辞の場合：完了接辞

筆者の調査及び Kim et al. (2008: 41-42)の記述によれば、完了接辞 -xV～-kV の母音 V は、ə と o という 2 つの母音の間で交替する。しかし、Li (1996: 182)によれば、その母音 V は a, ɨ, ɔ, u という 4 つの母音の間で交替するとされている(ɨ と ɔ はそれぞれ本稿の ə と o に相当すると考えられる)。Li (1996)が記述した a と ə の対立と、o と u の対立は、どちらも高さによる対立である。しかし、高さによる対立は筆者の調査には見られない(表 10)。

表 10　完了接辞の母音交替に関する Li (1996)の調査と筆者の調査の差異

Li (1996)の調査	筆者の調査
qa-χ***a*** ‘防ぐ-Pfv’	xá-x***ə*** [χáɣə] ‘防ぐ-Pfv’
ɨldɨ-x***ɨ*** ‘光る-Pfv’	əldə́-x***ə*** [əldɤ́ɣə] ‘光る-Pfv’
maʧu-x***u*** ‘痩せる-Pfv’	macó-x***o*** [maʧʰóɣo] ‘痩せる-Pfv’ cf. bisú-x***o*** [pizúɣo] ‘撫でる-Pfv’
ɔm-x***ɔ*** ‘飲む-Pfv’	omú-x***o*** [ɔmúɣo] ‘飲む-Pfv’ cf. ó-x***o*** [ɔ́ʁɔ] ‘なる-Pfv’

[1] 1 音節の動詞語根

まず 1 音節の動詞語根の例を見る。表 11 は各母音の 1 音節動詞語根の例である。表 11

の例では、動詞語根の母音が非円唇母音であれば完了接辞の母音は ə となり、動詞語根の母音が円唇母音であれば完了接辞の母音は o となる。これらの例から見る限り、完了接辞の母音を確定する要素は語根の母音の円唇性のようである。

表 11　1 音節の動詞語根における完了接辞

(1 列目は語根の母音であり、2 列目は接辞の母音である)

		例
a	ə	wá-x***ə*** ‘殺す-Pfv’
i	ə	jí-x***ə*** ‘来る-Pfv’
ə	ə	jə́-k***ə*** ‘食べる-Pfv’
e	―	(例なし)

		例
o	o	ó-x***o*** ‘なる-Pfv’
u	o	bú-x***o*** ‘与える-Pfv’
ü	―	(例なし)

[2] 2 音節以上の動詞語根

表 12　2 音節の動詞語根における完了接辞の母音

(1 列目は語根 1 音節目の母音であり、1 行目は語根 1 音節目の母音である)

	a	i	ə	e
a	(例なし)	fakcí-x***ə*** ‘裂ける-Pfv’	amgə́-x***ə*** ‘寝る-Pfv’	(例なし)
i	sitá-x***ə*** ‘遅れる-Pfv’	tilí-x***ə*** ‘上げる-Pfv’	isə́-x***ə*** ‘足りる-Pfv’	(例なし)
ə	šəndá-x***ə*** ‘置く-Pfv’	fəncí-x***ə*** ‘怒る-Pfv’	gələ́-x***ə*** ‘怖がる-Pfv’	(例なし)
e	(例なし)	eyí-x***ə*** ‘流れる-Pfv’	weylə́-x***ə*** ‘働く-Pfv’	(例なし)
o	xolá-x***ə*** ‘読む-Pfv’	solí-x***ə*** ‘誘う-Pfv’	(例なし)	(例なし)
u	udá-x***ə*** ‘買う-Pfv’	sují-x***ə*** ‘逃げる-Pfv’	futə́-x***ə*** ‘踏む-Pfv’	(例なし)
ü	(例なし)	düylí-x***ə*** ‘奪う-Pfv’	(例なし)	(例なし)

(前に続く)

	o	u	ü
a	macó-x***o*** ‘痩せる-Pfv’	axdú-x***o*** ‘信じる-Pfv’	(例なし)
i	(例なし)	bisú-x***o*** ‘撫でる-Pfv’	(例なし)
ə	(例なし)	(例なし)	(例なし)
e	(例なし)	(例なし)	(例なし)
o	comcó-x***o*** ‘しゃがむ-Pfv’	jobú-x***o*** ‘疲れる-Pfv’	oj’ű-x***ə*** ‘キスする-Pfv’
u	(例なし)	bujú-x***o*** ‘茹でる-Pfv’	(例なし)
ü	(例なし)	(例なし)	c’üc’ű-x***ə*** ‘出る-Pfv’

表 12 の例では、語根の母音が全て非円唇母音(a, i, ə, e)の場合、完了接辞は -xə となり、語根の母音が全て円唇母音(u, o)の場合、完了接辞は -xo となる。この点においては表 11 と同様である。しかし、語根母音が全て円唇母音 ü のみの場合、完了接辞は ə となる(c’üc’ű-x***ə***)。そのため、完了接辞の母音を確定する要素は語根の母音の円唇性のみではない。語根の母

音が前舌母音であれば、円唇であっても、完了接辞の母音は非円唇の ə となる。

3.1.に述べたように、語根においては円唇性が一致しない場合が存在する。この場合、即ち複数音節を持つ語根で、異なる音節の母音の円唇性が一致しない場合においては、語根に後続する完了接辞の母音は、接辞直前の音節の母音の円唇性により確定される(xolá-x***ə***, udá-x***ə***, solí-x***ə***, futə́-x***ə*** , macó-x***o***, axdú-x***o***, bisú-x***o***)[9]。また、前述したように、前舌円唇母音 ü は、他の円唇母音(o, u)と違い、完了接辞の母音を ə に確定する。ü と o が共起する語根においては、完了接辞の母音は、直前の音節の母音の性質によって確定される(oj'ű-x***ə***)。

3 音節の動詞語根も上記のルールに従う。例えば、yadúlu-x***o*** 'お腹が空く-Pfv'、awúlə-x***ə*** '猟をする-Pfv' などが挙げられる。

以上をまとめると、次のようになる。完了接辞の母音を確定する要素は、接辞直前の音節の母音の性質である。完了接辞の母音は、語根における接辞直前の音節以外の音節の母音との関係が見られない。即ち、完了接辞には(3-2)のような形態音韻的交替がある。

(3-2a) CV > Cə / [- round] _ or [+ front] _
(3-2b) CV > Co / [+ round, - front] _ ((3-2)では CV は完了接辞であり、C＝x, k)

[3] 語根母音の性質の影響が中断される場合

不変接辞が語根と完了接辞の間に挿入される場合がある。2 音節の動詞語根に不変接辞 -bu- '使役' や -na- '移動' がつく場合、語根の 2 音節目の母音は a 以外であれば、全て脱落する(e.g. doš***ú***-xo '入る-Pfv' と doš-bú-xo '入る-Caus-Pfv'、á.c***ə***.-xə /L.-.-/[10] '会う-Pfv' と ac-ná-xə '会う-移動-Pfv')。この場合、語根母音の性質の影響が接辞の挿入により中断される。即ち、完了接辞の母音の性質は挿入される不変接辞の母音の性質と一致する(表 13, 14)。

表 13 不変接辞 -na- の挿入による完了接辞の母音の交替

不変接辞挿入前：-xo	不変接辞挿入後：-xə
tugú-x***o*** '落ちる-Pfv'	tuŋ-ná-x***ə***[11] '落ちる-移動-Pfv'

表 14 不変接辞 -bu- の挿入による完了接辞の母音の交替

不変接辞挿入前：-xə	不変接辞挿入後：-xo
bənə́-x***ə*** '送る-Pfv'	bən-bú-x***o*** '送る-Caus-Pfv'
bí-x***ə*** '住む-Pfv'	bi-bú-x***o*** '住む-Caus-Pfv'

[9] 清格尔泰(1982=1998：269-271)と Li (1996: 182)にある完了接辞の例においても、完了接辞の母音交替を確定する要素は、語根全体ではなく、完了接辞の直前の音節の母音である。例えば、Li (1996)にある dəndzɨ-xɨ '聞く-Pfv' は、語幹 1 音節目に円唇母音 ɔ があるものの、接辞の母音が接辞直前の音節の母音 i の影響で非円唇の ɨ となる。清格尔泰(1982=1998)の sɯrbu-ʁɔ '気付く-Pfv' は、語幹 1 音節目に非円唇母音 ɯ があるものの、接辞の母音が直前の音節の母音 u の影響で円唇の ɔ となる。

[10] 三家子のアクセントは強弱アクセントである。強く発音される音節はほとんどの場合高く発音されるが、低く発音される場合と上がる声調と下がる声調をとる場合もある。声調の選択は恣意的ではなく、ほとんどの場合語形により確定される。本稿では、アクセントが低い声調を取る場合、/L/ という記号で表す。高い声調を取る場合、声調記号を省略する。また、アクセントを持たない音節の声調を /-/ で表す。

[11] *tugu-na-xə > *tug-ná-xə (注 5 を参照) > tuŋ-ná-xə (三家子には子音連続 -gn- が存在しない為、-gn- > -ŋn-)。

c’üc’ű-x***ə*** ‘出る-Pfv’	c’üc’-bú-x***o*** ‘出る-Caus-Pfv’
daxə́-x***ə*** ‘従う-Pfv’	dax-bú-x***o*** ‘従う-Caus-Pfv’
dij’í-x***ə*** ‘燃える-Pfv’	dij’-bú-x***o*** ‘燃える-Caus-Pfv’
feyí-x***ə*** ‘沸く-Pfv’	fey-bú-x***o*** ‘沸く-Caus-Pfv’
gəc’í-x***ə*** ‘凍る-Pfv’	gəc’-bú-x***o*** ‘凍る-Caus-Pfv’
gələ́-x***ə*** ‘驚く-Pfv’	gəl-bú-x***o*** ‘驚く-Caus-Pfv’
mij’í-x***ə*** ‘砕く-Pfv’	mij’-bú-x***o*** ‘砕く-Caus-Pfv’
sayn’í-x***ə*** ‘治る-Pfv’	sayn’-bú-x***o*** ‘治る-Caus-Pfv’
tá-x***ə*** ‘見る-Pfv’	ta-bú-x***o*** ‘見る-Caus-Pfv’
taxə́-x***ə*** ‘見知る-Pfv’	tax-bú-x***o*** ‘見知る-Caus-Pfv’
uká-x***ə*** ‘隠れる-Pfv’	uka-bú-x***o*** ‘隠れる-Caus-Pfv’
wá-x***ə*** ‘殺す-Pfv’	wa-bú-x***o*** ‘殺す-Caus-Pfv’

接辞の挿入により、母音の性質の影響が中断されること自体は、母音調和が存在しない証拠ではない。但し、表 13, 14 からは、次のことが分かる。完了接辞の母音を確定する要素はその直前の音節の母音であるという現象は、完了接辞の直前の動詞語幹が(i)単独の語根である場合、(ii)語根と派生接辞からなる語幹である場合、のどちらにおいても存在する。

[4] 語根母音の性質の影響が中断されない場合

筆者の調査では、ほぼ全ての動詞において完了接辞の母音を確定する要素は、その直前の音節の母音である。例外は təwú-xə ‘載せる-Pfv’という一例のみである。この動詞の完了形には揺れがあり、təwú-xə の他に tə́.wu.-xə /L.-.-/ の形式も見られる。təwú-xə の形式では、完了接辞の直前の母音が u であるため、(3-2b)によれば、接辞の母音が o であると予測できるが、しかし実際は ə である。これに関しては、次のように解釈することができると考える。

三家子の təwú-xə に対応する文語は te-bu-he ‘座る-Caus-Pfv’ である。そして、三家子の tí-xə ‘座る’は文語の te-he ‘座る-Pfv’ に対応する。そのため、təwú-xə の -wu- という要素は文語の使役接辞 -bu- に対応すると考えられる。三家子で使役を表す接辞は他に文語と同形の -bu- もある(表 14)。-wu- で使役を表す場合は tə-wú-xə と dá.-wə.-xə /L.-.-/ ‘点く-Caus-Pfv’ (cf. dá-xə ‘点く-Pfv’) という 2 例しかないようである。tə-wú-xə と dá-wə-xə 及び tí-xə と dá-xə の活用形を表 15 にまとめた。「---」は現時点で該当する形式を見つけていないことを表す。

表 15　təwú-xə ‘載せる-Pfv’、dáwə-xə ‘点ける-Pfv’、tí-xə ‘座る-Pfv’、dá-xə ‘点く-Pfv’ の活用

完了形	未完了形	命令形	未完了相の形動詞形	-ke ‘希望’ がつく形式
tə-wú-xə ~ tə́.-wu.-xə /L.-.-/	tə-m /L/	tə́-wə	tə-wú-l	tə-wú-ke
dá-wə-xə /L.-.-/	da-m /L/	dá-wə	da-wú-l	da-wú-ke
tí-xə	ti-m	tye	---	tí-ke
dá-xə	da-m	(なし)	---	(なし)

tə-wú-xə, dá-wə-xə, tə-m などにおける -wu- ~ -wə- ~ -ø- は、以前、使役接辞 -bu- であったものが (3-3) のような変化を経た結果であると考えられる。

(3-3a) *bu > wu / _ [-labial], with accent
(3-3b) *bu > wə ~ wu / _ [-labial], without accent
(3-3c) *bu > *wu > ø / _ [+labial], with accent [12]

前述したように、tə-wú-xə における -wu- は本質的に接辞に由来する要素である。そのため、完了接辞 -xə が直前の音節に一致しないのは、語根の母音 ə が接辞要素であると考えられる -wu- によっては中断されず、完了接辞の母音を ə に確定するからであると考える。

[3]と[4]をまとめると、次のようになる。不変接辞 -bu-, -na- が語根と完了接辞の間に挿入される場合、語根の母音の性質の影響が中断される。しかし、-wu- という接辞に由来する要素が語根と完了接辞の間に挿入される場合、語根の母音の性質の影響が中断されない。

3.2.1.2. 派生接辞の場合：指小接辞

形容詞の指小接辞 -kVn の母音 V は、ə と u という 2 つの母音の間で交替し、接辞直前の語根音節の母音の円唇性により確定される。非円唇の場合、aj'í '小さい' と aj'í-k***ə***n '小さい-少し'、mic'kén '浅い' と mic'kí-k***ə***n '浅い-少し'、nikə́lə '薄い' と nikə́l-k***ə***n '薄い-少し'などの例があり、円唇の場合、bólgo '清潔な' と bolgó-k***u***n '清潔な-少し'、falxún '暗い' と falxú-k***u***n '暗い-少し'の例がある[13]。

3.2.2. 接辞の母音が語根の母音に与える同化

[1] 屈折接辞の場合

屈折接辞の場合においては、該当する例が見られない。

[2] 派生接辞の場合：道具を表す接辞

道具を表す接辞 -ko は不変接辞である。-ko の付加により、動詞の語根にある非円唇母音は円唇母音になる場合もあり(də́l***ə*** '顔' と dəl***ú***-ko '洗面器'、***e***li- '掃く' と ***ó***l-ko '箒')、ならない場合もある(***a***nə- '押す'に -ko がつくと ***á***n-t-ko '鍵' となり、*****ó***n-t-ko とはならない)。

3.2.3. 複数の接辞の場合

複数の接辞が同じ語根に後続する場合がある(e.g. 表 13, 14 の 2 列目)。しかし、この場合、形態音韻的交替のある接辞が 1 つ以上存在する例は筆者には見つかっていない。即ち、複数の接辞の場合、(i) 全ての接辞が不変接辞(e.g. ta-ná-m '見る-移動-Ipf')、(ii) 形態音韻的交替の接辞が 1 つある(e.g. ta-ná-xə '見る-移動-Pfv')、という 2 つの可能性しかないようである。

---

[12] 2 音節動詞未完了形ではアクセントが常に 2 音節目に来る。(3-3c) は完了形の 2 音節に表れる変化である。そのため、(3-3c) の条件に "with accent" とつけている。例えば、tə-m の場合、*tə-bú-m > *tə-wú-m > tə-ø-m という変化があったと考えられる。

[13] 語根最後の子音 n の脱落、アクセントの移動、語根の母音の交替は指小接辞の付加による。

3.2.4. 考察

前述した(2.[1])ように、母音調和に不可欠な特徴に関しては Anderson (1980: 11)は unboundedness を挙げた。それによれば、母音調和による共起及び同化のスコープは音韻論的単位(普通は語)であり、確定した音節数ではない。スコープが確定した音節数(例えば隣の音節まで)の場合の同化は metaphony である。3.2.2.[2]における道具を表す接辞の場合、də́l***ə*** + -ko > dəl***ú***-ko という変化では、同化は隣の音節にしか影響を及ぼさない。そのため、この接辞は metaphony だと判断できる。3.2.1.1. の完了接辞の場合、接辞母音の ə と o は直前の語根音節の母音の円唇性により確定される。この場合においては、tə-wú-xə という一例を除き、母音同化のスコープは接辞とその直前の音節のみであり、音韻論的語全体ではない。3.2.1.2. の指小接辞も同様である。

3.1.から、三家子では語根内における母音の共起のグルーピングが見られない。3.2.から、語根と接辞の間における同化が母音調和の条件を満たさないことが分かる。以上により、三家子のいわゆる母音調和は、理想的な母音調和とはかなり異なるものと考える。

4. 通時的変化

前述したように、三家子のいわゆる母音調和は理想的な母音調和とはかなり異なる。しかし、3.1.によれば、ə と o の共起は 1 例のみであり、a と o が(C_1)áC_2o という 2 音節の音素配列における例も 1 例のみである。この現象を解釈するため、次に通時的変化を考察する。

4.1. ə と o の例(その 1)

三家子では、名詞に格標示が後続すると、アクセントが移動する場合がある。アクセント移動により、母音が交替する場合(sə́w***ə*** ‘先生’> səw***ú***-də ‘先生-Dat’)としない場合(ám***ə*** ‘父’ > am***ə́***-də ‘父-Dat’)の両方が存在する。前者の例では、2 音節目で ə と u が交替する。Bynon (1977: 114-121)によれば、形態素に(互いに似ている)複数の異形態が存在する場合、その中の 1 つの異形態は、以前の形式の残りであり、現在の形式の基底形に現れるという可能性がある。sə́wə の場合、少なくとも sə́wə と səwú という 2 つの異形態が存在するため、そのうちのどちらかが以前の形式だと考えられる。即ち(4-1)と(4-2)のどちらかが起きたと考えられる。そして、弱く発音される音は強く発音する音より変化が起り易いと考えられるため、(4-1)は(4-2)より可能性が高いと考えられる。

(4-1) *sə́w***u** > sə́w***ə***
(4-2) *səw***ə́** > səw***ú***

また、三家子では次の(4-3)のような交替は共時的に常に起きる。そのため、もし (4-1) が起きず、*sə́wu が現在の三家子に残るとしたら、(4-4)の変化が起きると考えられる。

(4-3) u > o / _#, without accent　((3-1b)を参照されたい)
(4-4) *sə́w***u** > *sə́w***o**

(4-1)という通時的変化が起きなければ､(4-4)の結果としてəとoの共起が起こりうるため、əとoの共起が少ない原因として、(4-1)のような通時的変化があったと考えられる。

4.2. əとoの例(その2)

jwa ‘10’とəm ‘1’は、複合数詞jwoómo ‘11’を成す。jwaとəmのどちらにも円唇母音がないにもかかわらず、jwoómoの母音は円唇母音oに統一された。əmの右側にø > o / _# という変化が現れる。このoは独立の形態素としては解釈できないため、ómoとəmは異形態関係だと考えられる。即ちəmはəmとómoという2つの異形態を持つ。それにより、əmとómoの解釈として、以下の(4-5)と(4-6)という2つの可能性が考えられる。

(4-5a) *ə́m***o** > əm
(4-5b) *jw***aə́**mo > jw***oó***mo

(4-6a) *ə́m***u** > əm
(4-6b) *jw***aə́**m***u*** > *jw***oó**m***u*** > jw***oó**m***o***

今の段階では(4-5)か、(4-6)かを明確に述べることは出来ない。(4-5)の可能性では、(4-5a)と(4-5b)のどちらかが発生しなかったなら、*ə́mo という形式が残る。(4-6)の可能性では、(4-6a)が発生しなかったなら、次の(4-7)が発生する。したがって、(4-5)も(4-6)も結果的には同じ*ə́moとなる。

(4-7) *ə́m***u** > *ə́m***o**

上記の現象と分析により、əとoの共起が少ない原因として、(4-5)と(4-6)のような変化があったと考えられる。

4.3. aとoの例

三家子では、動詞の命令形は接辞がつかない形式であり、未完了相の形動詞形は語幹に -lがつく形式である。命令形及び形動詞形の語幹は、普通は同形である(アクセントを除く)。例えばtáw***ə***, taw***ə́***(-l) ‘上る’、gid***á***, gid***á***(-l) ‘押す’等。しかし、命令形と形動詞形が異なる場合もある。例えばyáw***ə***, yaw***ú***(-l)’歩く’。この例の形動詞形では2音節目にアクセントがつくことによりəがuとなる。前述した理由により、次の(4-8)と(4-9)のどちらかが起きた可能性がある。そのうちで、(4-8)の方の可能性が高い。

(4-8) *yáw***u** > yáw***ə***
(4-9) *yaw***ə́** > yaw***ú***

なお、(4-8)が発生しなかったなら、(4-3)により(4-10)が起る。

(4-10) *yáw***u** > *yáw***o**

(4-8)という通時的変化が起きなければ、(4-10)の結果としてáxo以外の(C_1)áC_2oが起こり

うるため、ə と o の共起が少ない原因として(4-8)のような変化があったと考えられる[14]。

4.4. 考察

上述した通時的同化の例を以下の(4-11, 12)にまとめることができる。

(4-11) [+round] > [-round] or ø / [-round] C _　　(例(4-1, 4-5a/4-6a, 4-8))[15]
(4-12) [-round] > [+round] / _ C [+round]　　(例(4-5b/4-6b))

変化の環境にある C は m と w のみである。m と w は共に唇子音であるため、(4-11, 4-12)の変化は C による変化である可能性もある。しかし、以下の(i)と(ii)の理由により、それは C による変化ではないと思われる。

(i) C は円唇母音を非円唇に変える(4-11)、非円唇母音を円唇母音に変える(4-12)という逆の方向の変化を両方とも起こす可能性は低いと考えられる。

(ii) (4-11, 4-12)が唇子音による変化であれば、それが起らない場合(amə́-də, tawə́-l 等)の解釈はできない[16]。

以上により、(4-11, 4-12)は以前の形式を反映した変化である可能性が高い。即ち、上記の例では、通時的変化により、語根の母音の円唇性が統一され、ə, a と o の共起が避けられる。

(C_1)áC_2o が一例のみであるということは本節の通時的変化で解釈できる。しかし、本節(4.)の例は全て ə, a と語末の o の例であり、ə と語中の o が一例を除き共起しないことは、上記の例では解釈できない。この問題を解決するため、次に文語を考察する。

5. 文語との比較[17]

5.1. 文語における母音調和

文語には a[ɑ], ə[ɤ][18], o[ɔ], i[i], u[u], ū という 6 つの母音があり[19]、母音調和が存在する。Gorelova (2002: 95)によれば、文語の母音は、弱い母音 ə、強い母音 a, o, ū、中立母音 i, u に

---

[14] なお、áxo に(4-8)のような変化がなかった理由は筆者には不明であるが、次の可能性があると推測する。áxo の語末の o は、u に由来するものではない可能性がある。(4-8)のような変化が起きる条件は、語末が u であることである。そのため、(4-8)のような変化は áxo には起きない可能性がある。

[15] 前述の表 15 にある təwú-l ~ tə́wə と dawú-l ~ dáwə も(4-11)の例である。

[16] 唇子音 C は(4-11)の変化の原因ではないと考えられるが、しかし(4-11)の例における C が全て唇子音であるということは偶然ではないと考える。なぜなら、C が唇子音以外の子音である場合、(4-11)の変化後の基底形も消えている可能性があるからである。例えば、látə ‘くっつける.Imp’ の形動詞形は latə́-l である。この動詞はもともと látə であり、変化が起こっていないという可能性はもちろんある。しかし、確かな根拠がないが、元々*látu であり、*látu > látə という変化が起こったという可能性も否定できない。ただ、後者の可能性では、C は [-labial] の t であるため、基底形が消えており、2 音節目の母音 ə はアクセントが付与されても円唇の u には戻らない。

[17] 本節で文語と三家子を比較する目的は、三家子で ə と語中の o がほとんど共起しないことの原因を考察することにある。そのため、文語と三家子の母音調和を全体的に比較し、その違いの原因を考察することは本節の主旨ではない。

[18] Möllendorff (1898)の文語のローマ字転写では、本稿の ə の代わりに e が使用される。しかし、三家子には ə [ɤ~ə~ɯ] と e [e] の両方が存在し、Möllendorff が採用した文語のローマ字表記 e は三家子の ə に近い音価を持つと考えられる。誤解を避けるため、本稿では文語の[ɤ]の表記に ə を用いることにする。

[19] 母音の音声表記は河内(1996: 1)による。ū の音価に関しては意見が統一していない為、音声表記を省く。

分類される。また、Gorelova (2002: 89)によれば、その「弱い」と「強い」という用語はそれぞれ「高/前」と「低/後」を表す。しかしこの母音調和のグルーピングは Aoki (1968)には見られない。この種類のグルーピングは、「高/前」と「低/後」の区別という意味では、ATR と RTR の区別に近いと考えられる。Zhang (1996)は ə と a、u と ū はそれぞれ ATR と RTR の対立を示すと述べている。Kiyose (1997: 149-150)によれば、歴史的に 12 世紀の満洲語(即ち女真語)は前舌対後舌のグルーピングの母音調和システムを成していたが、母音に歴史的変化が起きた結果、文語の形となった。以上の分析から、女真語から満洲語に変化する際に、母音調和のグルーピングが「前舌／後舌」から「ATR／RTR」へと変化した可能性があることがわかる。文語の母音調和に関する先行研究は他にも数多くある。しかし、Gorelova (2002: 97)は文語の母音調和の分布に関しては、まだ充分な解釈がなされていないと述べた。

5.1.1. 共起

文語では、原則として強い母音(a, o, ū)と弱い母音(ə)が同じ語根には共起しない。

5.1.2. 同化

[1] 完了接辞

完了等を表す接辞 -hV～-kV は、語根の母音が中立母音のみの場合、-ha となる例(isi-ha ‘至る-Pfv’)と -hə となる例(bu-hə ‘与える-Pfv’)の双方がある。

語根の母音が弱い母音である場合、接辞の母音が -hə となる(gənə-hə ‘行く-Pfv’)。

語根の母音が強い母音である場合、接辞直前の母音が o (oo を除く)であれば、接辞の母音が -ho となる(okdo-no-ho ‘迎える-移動-Pfv’)。接辞直前の母音が o 以外の母音であれば、接辞の母音が -ha となる(ala-ha ‘知らせる-Pfv’、yabu-ha ‘歩く-Pfv’)[20]。

oo の場合、2 つ目の o は[u]と発音されるため、後続する完了接辞が -ha となる(doo-ha ‘渡る-Pfv’)。即ち、-hV を-ho に確定する要素は語根全体ではなく、語根最後の音節の母音である。前述した unboundness の原則(2.)によれば、母音調和におけるスコープは隣の音節を問題とするのではなく、形態的な語として捉えるべきである。そのため、a と o の間の交替は母音調和の交替ではなく、metaphony である。

[2] 未完了接辞

未完了接辞 -rV における V を確定するのは、接辞直前の音節の母音である。直前音節の母音が強い非円唇母音の a である場合、-rV は -ra となり(tuwa-ra ‘見る-Ipf’)、直前音節の母音が強い円唇母音の o である場合、-rV は -ro となり(bodo-ro ‘計算する-Ipf’)、直前音節の母

[20] Möllendorff (1892: 10-12)は、文語の動詞の完了接辞と未完了接辞の不規則形の例を記述している。その例の中に、fo-ha と go-ha と yo-ha が記述されている。確かな根拠がないが、この 3 つの形式は、それぞれ *foo-ha と*goo-ha と*yoo-ha に由来する可能性がある。胡増益(1994: 836)や福田(2008: 927)は、yoo- は yo- に同じであると記述している。前述したように、oo は[u]の発音で終わるため、直後に来る接辞 -hV を -ho ではなく -ha に確定する。したがって、これらの例においても「-hV を-ho に確定する要素は、語根全体ではなく、語根最後の音節の母音である」には反しない。しかし、Möllendorff (1892: 10)が挙げた derakula-he, faishala-he, morila-ho, morila-ro, siderile-ha, giyolorše-ho, giyolorše-ro は、ここで述べる完了接辞及び後述する未完了接辞の母音調和の反例である。これらの例の解釈は筆者には不明である。

音が弱い母音 ə 及び中立母音 i, u である場合、-rV は -rə となる(mutə-rə ‘出来る-Ipf’、dosi-rə ‘入る-Ipf’、yabu-rə ‘歩く-Ipf’)。文語の未完了接辞 -rV の場合は、三家子の完了接辞 -xV～-kV と同様に、接辞の母音を確定する要素は、語根全体ではなく、接辞直前の母音である。前述した unboundness の原則によれば、文語の未完了接辞は母音調和だとは言い難い。

三家子の場合の未完了接辞は不変接辞 -l である[21](3.1.2.)。文語と三家子における完了接辞・未完了接辞の母音の確定要素を表 16 にまとめた。

表 16　文語と三家子における完了接辞・未完了接辞の母音を確定する要素のまとめ

<table>
<tr><th></th><th></th><th>完了接辞</th><th>未完了接辞</th></tr>
<tr><td rowspan="2">文語</td><td>a, o 対 ə</td><td>母音の確定要素＝語根全体
(母音調和の条件を満たす)</td><td rowspan="2">母音の確定要素＝接辞直前の母音
(母音調和の条件を満たさない)</td></tr>
<tr><td>a 対 o</td><td>母音の確定要素＝接辞直前の母音
(母音調和の条件を満たさない)</td></tr>
<tr><td>三家子</td><td>o, u 対
他の母音</td><td>母音の確定要素＝接辞直前の母音
(母音調和の条件を満たさない)</td><td>(母音交替がない)</td></tr>
</table>

以上により、語根内及び語根と完了接辞の間においては、文語の母音調和は a, o 対 ə の間に存在し、a 対 o の間には存在しないことが明らかとなった。次に、文語の a, o 対 ə を (i) a 対 ə 及び (ii) o 対 ə という 2 つの場合に分けて、対応する三家子の例を考察する。

5.2. 文語の a 対 ə の対立

前述したように、文語における a と ə の対立は、三家子では見られない。三家子においては、a を 2 つ以上持つ語が文語より少ない。文語において a を 2 つ以上持つ語の場合、その 2 つ目以降の a は三家子では ə として現れることが多い。

次は語根内の共起及び完了接辞の母音同化の場合の例である。

5.2.1. 共起

上述のように、文語では a と ə は共起しない。a を 2 つ以上持つ文語の語は対応する三家子の形式では、2 つ目以降の a が ə となることが多い。そのため、三家子では a と ə の共起が可能である。次は各場合の例である。

[1] 語末に子音がない 2 音節の場合

文語の 2 音節語根で、2 音節目に結び子音(coda)がない場合、2 音節目の a は三家子でアクセントを持たず ə として現れる例が多いが(表 17(i))、アクセントを持ち、a として現れる例も少数ながら存在する(表 17(ii))。

[21] 文語で母音が交替する接辞に対応する三家子の接辞は、母音が交替する場合と不変接辞の場合のどちらもある。未完了接辞は後者に当てはまる。また、文語の移動接辞 -na-～-no-～-nə- に対応する三家子の -na- も不変接辞である。

表 17　a を 2 つ持つ 2 音節の文語の語根及び対応する三家子の形式（語末に子音がない）

(i)	意味	空	雨	妻の父	兄の妻	翼	腰
	文語	abka	aga	amha	aša	asha	dara
	三家子	ábkə	áxə	ámgə	ášə	áskə	dálə
	意味	目玉	鴉	手	鳥	苗字	帯
	文語	faha	gaha	gala	gasha	hala	hata
	三家子	fáxə	gáxə	gálə	gáskə	hálə	xátə
	意味	人	箸	年おいた	虎	小骨	目
	文語	niyalma[22]	sabka	sakda	tasha	xaga	yasa
	三家子	n'álmə	sábkə	sáxdə	táskə	xáxə	yásə
(ii)	意味	大きい	遅い	にんにく			
	文語	amba	manda	suwanda[23]			
	三家子	ambá	mandá	swandá			

［2］語末に子音がある 2 音節の場合

文語の 2 音節語根で、2 音節目に結び子音(coda)がある場合、2 音節目は三家子でアクセントを持つ。文語の 2 音節目の a は三家子では ə として現れる例が多い(表 18(i))。しかし、a として現れ、結び子音が脱落する例もある(表 18(ii))。

表 18　a を 2 つ持つ 2 音節の文語の語根及び対応する三家子の形式（語末に子音がある）

(i)	意味	官吏	味	世代	オンドル	砂糖	枝	7
	文語	alban	amtan	jalan	nahan	šatan	gargan	nadan
	三家子	albə́n	amtə́n	jalə́n	naxə́n	šatə́n	galxə́n	nadə́n
(ii)	意味	蚊						
	文語	galman						
	三家子	galmá						

［3］3 音節の場合

文語の 3 音節語根では、3 音節の母音が全て a である場合、三家子の中で対応する形式が次のようになる可能性がある。(i) 2, 3 音節目の母音が共にアクセントを持たず ə となる。この場合、アクセントを持つ 1 音節目は低い声調を取る。(ii) 2 音節目の母音が脱落し、3 音節目の母音がアクセントを持たず、ə となる。この場合、アクセントを持つ 1 音節目は高い声調を取る。(iii) 2 音節目の母音はアクセントを持ち、a となり、1, 3 音節目の母音はアクセントを持たずそれぞれ a, ə となる。(iv) 2 音節目の母音はアクセントを持ち、ə となり、1, 3 音節目の母音はアクセントを持たずそれぞれ a, ə となる。表 19 は各場合の例である。

[22] Haenisch (1961: 33)、上原(1960: 65)によれば、文語の -iy- は音節を成さない子音である。
[23] Harlez (1884: 16)、Haenisch (1961: 33)、河内(1996: 53)によれば、文語の母音間の w は発音されない。したがって、文語の suwanda にある uwa は 1 音節であり、suwanda 全体は 2 音節語である。

また、文語の 3 音節の語根では、2 つの音節の母音が a であり、もう 1 つの音節の母音が a ではない場合がある。例えば、3 音節語根で、2, 3 音節目のみが a であり、1 音節目が他の母音である場合がある。それに対応する三家子の語では、2 音節目がアクセントを持ち、a となり、3 音節目はアクセントを持たず、ə となるという可能性しかない(表 20)。

表 19　a を 3 つ持つ 3 音節の文語の語根及び対応する三家子の形式

(i)	意味	のちに	低い
	文語	amala	faŋkala
	三家子	á.mə.lə /L.-.-/	fáŋ.kə.lə /L.-.-/
(ii)	意味	はさみ	
	文語	hasaha	
	三家子	xáskə	
(iii)	意味	葉	
	文語	abdaha	
	三家子	afdáxə	
(iv)	意味	甕	
	文語	aŋgara	
	三家子	aŋŋə́lə	

表 20　a を 2 つ持つ 3 音節の文語の語根及び対応する三家子の形式

意味	明日	魚	大腿
文語	cimaha	nimaha	suksaha
三家子	cumáxə	nimáxə	suksáxə

5.2.2. 同化

前述したように、動詞の語根に a がある場合、文語の完了接辞の母音は a となり、三家子の完了接辞の母音は ə となる(表 21(i))。動詞の語根に ə がある場合の例は(ii)に挙げる。

表 21　完了接辞に -ha, -he をとる文語の動詞及び対応する三家子の形式

(i)	意味	知る-Pfv	上る-Pfv	見る-Pfv	殺す-Pfv
	文語	sa-ha	tafa-ha	tuwa-ha	wa-ha
	三家子	sá-xə	tá.wə.-xə /L.-.-/	tá-xə	wá-xə
(ii)	意味	送る-Pfv	占める-Pfv	食べる-Pfv	溶ける-Pfv
	文語	bənə-hə	əjələ-hə	jə-kə	wəŋ-kə
	三家子	bənə́-xə	əjə́lə-xə	jə́-kə	wə́-xə

5.3. 文語の o 対 ə の対立

文語の o と ə の対立は、前述したように三家子にも現れる場合がある。

5.3.1. 共起

文語では、o と ə は原則として語根においては共起しない(5.1.)。三家子では、語根において o と ə が共起する例は 1 例のみである(3.1.)。

5.3.2. 同化

文語の場合、完了接辞の母音を確定する要素が語根全体であるため、語根に o があれば、接辞の母音は ə とはならない。三家子の場合、完了接辞の母音を確定する要素はその直前の母音である。そのため、接辞直前の母音以外に語根に o があっても、接辞直前の母音が o でなければ、接辞の母音は ə となる(表 22)。また、三家子の例は表 22 以外にも xolá-xə ‘読む-Pfv’、xolxá-xə ‘盗む-Pfv’、solí-xə ‘誘う-Pfv’ もある。

表 22　完了接辞に -ho をとる文語の動詞及び対応する三家子の形式

意味	キスする-Pfv	なる-Pfv
文語	ojo-ho	o-ho
三家子	oj’ű-xə	ó-xo

上に記したように、完了接辞の母音同化において、文語と三家子のどちらにも o と ə の対立があるが、対立のスコープは異なる。文語の場合、o と ə の対立のスコープは語根全体であり、三家子の場合、o と ə の対立のスコープは完了接辞とその直前の音節である。

5.4. 考察：三家子において ə と o がほとんど共起しない原因

文語における a と ə の対立は三家子にはない(5.2.)。しかし、文語における o と ə の対立は三家子にも存在する(5.3.)。前述(1.)したように、文語と三家子の違いが通時的変化によるものだとは言い切れない。確かな証拠はないが、三家子において ə と o が共起しない現象の一部は、歴史的に母音調和を持っていた時代の名残による可能性があると推測する。

即ち、「三家子には理想的な母音調和が存在しないものの、ə と o が共起しない」という現象の理由としては以下の 2 点が挙げられる。この 2 つの理由は共存しうる。

(i) 通時的変化による(4.)。この点は三家子の内部再建を根拠とする。

(ii) 母音調和を持っていた昔の時代の名残(5.)。この点は文語との比較による推測であり、根拠が薄い。

6. 結論

満洲語三家子方言では、少数の例外を除き、全ての母音が語根において共起することが可能である。そのため、語根内における共起のグルーピングが見られない。また、語根と接辞の間における母音の同化では、接辞の母音を確定する要素は隣の音節までであり、それ以上には及ばない。そのため、「母音調和のスコープは音韻的な語である」という母音調和の必要条件に反する。したがって、三家子のいわゆる母音調和は理想的な母音調和とはかなり異なるものと考える。

また、ə と o は 1 例を除き、語根では共起しない。この現象には (i) 通時的変化、(ii) 母音調和を持っていた昔の名残、という 2 つの可能性があると考えられる。この 2 つの理由は共存しうる。

略語一覧　C：子音。Caus：使役。Dat：与格。Imp：命令。Ipf：未完了。/L/：アクセントを持つ音節が低い声調をとる。Part：分詞(形動詞)。Pfv：完了。V：母音。Vr：動詞化接辞。

参考文献

Anderson, Stephen R. (1980) 'Problems and Perspectives in the Description of Vowel Harmony'. In Vago, Robert M. (ed.) *Issues in Vowel Harmony*, pp. 1-48. Amsterdam: John Benjamins B.V.

Aoki, Haruo. (1968) 'Toward a Typology of Vowel Harmony'. *International Journal of American Linguistics.* 34: 142-145.

Bynon, Theodora. (1977) *Historical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.

福田昆之 (2008) 『増訂満洲語文語辞典』横浜：FLL.

Gorelova, Liliya M. (2002) *Manchu Grammar*. Leiden.Bosten.Köln: Brill.

Haenisch, Erish. (1961) *Mandschu-Grammatik. Mit Lesestuecken und 23 Texttafeln*. Leizip: VEB Verlag Enzyklopaedie.

Harlez, C. De. (1884) *Manuel de la langue Mandchoue. Grammaire. Anthologie & Lexique.* Paris: Maisonneuve Frere & Ch. Leclec.

亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著) (1996)『言語学大辞典第 6 巻』東京：三省堂.

河内良弘 (1996)『満洲語文語文典』京都：京都大学学術出版会.

胡增益 (1994)『新满汉大词典』乌鲁木齐：新疆人民出版社.

Kim, Juwon; Ko, Dongho; Chaoke, D. O.; Han Youfeng; Piao Lianyu; Boldyrev B. V. (2008) *Materials of Spoken Manchu.* Seoul: SNU Press.

Kiyose, Gisaburo. (1997) 'The Collapse of Palatal-Velar Harmony from Jurchen to Manchu'. *Historical and Linguistics Interaction between Inner-Asia and Europe. - Studia Uralo-Altaica.* 39: 147-150.

Krämer, Martin. (2003) *Vowel Harmony and Correspondence Theory*. Berlin.New York: Mouton de Gruyter.

Lass, Roger. (1984) *Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Li, Bing. (1996) *Tungusic Vowel Harmony: Description and Analysis*. The Hague: Holland Academic Graphics.

Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar with analysed texts.* Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

Nevins, Andrew. (2010) *Locality in Vowel Harmony*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

清格尔泰 (1982=1998)「满洲语口语语音」『清格尔泰民族研究文集』pp. 232-355. 北京：民族出版社.

津曲敏郎 (1992)「満州語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典第 4 巻』pp. 203-205. 東京：三省堂.

上原久 (1960)『満文満洲実録の研究』東京：不昧堂.
王海波 (2009)『三家子満洲語の基礎的記述』東京大学大学院人文社会系研究科修士論文.
Zhang, Xi. (1996) *Vowel systems of the Manchu-Tungus languages of China*. Doctoral dissertation. University of Toronto.
赵阿平&朝克 (2001)『现代满语研究』哈尔滨：黑龙江教育出版社.

Remarks on the Existence of Vowel Harmony in the Sanjiazi Dialect of Manchu

Haibo WANG
(University of Tokyo)

Sanjiazi Manchu is one of the existing dialects of the Manchu language. This paper shows that the so-called vowel harmony system in Sanjiazi Manchu is far from a typical one. First, vowels of different classes (e.g. low and high vowels, front and back vowels, rounded and unrounded vowels, ATR and RTR vowels) can all coexist in the same root, and consequently it is impossible to group them into any classes. Second, although the assimilation of vowels as a result of suffixation occurs in both directions, i.e. both from the stem to the suffix and from the suffix to the stem, the scopes of the assimilation in both cases only include the suffix and the vowel in the syllable immediately before the suffix. Therefore, it does not meet the requirement of vowel harmony that the scope of vowel harmony is a morphological unit (e.g. a phonological word) which is unbounded to a specific number of syllables.

In spite of the fact that the typical vowel harmony system does not exist in Sanjiazi Manchu, the coexistence of the vowels *ə* and *o* in the same root is only attested in one example. One possible explanation for this fact is that it is the result of the diachronic changes in Sanjiazi Manchu, and another explanation is the possibility that it might be the remains of an earlier stage of the language with the vowel harmony system.

（おう・かいは　oukaiha@gmail.com）